

コンピュータが古典研究に十分生かされているとはいえない。

古典学の領域とコンピュータ技術の画面において高い水準を誇るわが国は、特殊な文字コードを使用する東アジア漢字文化圏の一国という特殊性から、古典文献データベースの表記体系を確立する上で極めて有利な環境である。文字表記体系の確立は、このような環境にあるわが国の責務であるといっても過言ではない。本研究課題の実施により、わが国は、東アジア漢字圏のみならず、世界の東洋学、古典学研究にも極めて大きな貢献をなし得ると確信する。

本計画研究は、表記体系に関する過去に蓄積された研究成果を十分踏まえつつ、既存の様々な文字コードに対して可換的、中核的に機能し得る、新たな表記体系の確立を目指している。また、新しい表記体系で蓄積されたデータに対する編集・加工・検索を支援するツール群や、既存の表記体系との可換性を有する交換ツールを開発することによって、一貫した文字処理を可能とするシステムの開発を目指しており、これらの点において、本計画研究は、過去のいかなる文字処理にも見られない独自性を持っている。

研究計画・方法

1. 計画研究「古典文献データベースの表記体系確立」 基本研究項目

- (1) 古典文献研究のための表記体系確立の試み
- (2) 一貫した文字処理を可能とするシステムの研究
- (3) 表記体系拡張のガイドラインを提唱

なお、本計画研究の遂行にあたっては、民間のソフトウェア技術者の参加・協力が不可欠となるため、ソフトウェア技術者の技術提供に対する謝金がかかなり大きな比率を占めざるを得ない。また、最終年度には、文献処理ツールキット、研究者向けガイドライン冊子の開発・編集を企画しているため、その関連費用を「その他」の項で要求してある。

2. 平成11年度の研究計画

主として、先行研究の成果の吸収・資料収集・表記体系の設計に充てる。

- (1) 計画研究「古典文献データベースの表記体系確立」
研究概要・手順の策定（調査・研究旅費）
- (2) コンピュータ技術に関する専門的知識の供与（謝金）
- (3) 諸国語資料の収集と、コンピュータへの取込み（コンピュータ等の備品購入費用）
- (4) インターネットを利用した各分野の研究者との情報交換（通信費）

A04 東アジアの科学と思想

研究代表者 川原 秀城
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究目的

本研究の目的は、東アジアの前近代の科学関連資料・科学古典を収集整理し、それを通して当時の科学と科学思想を、東アジア文明総体の中に位置付けるところにある。具体的には分析の時代を17から19世紀に限定して、中国明清期の漢訳西洋科学書と暦算学書、朝鮮時代の天文数学書と実学書、日本江戸期の和算書と天文学書を読解・比較分析し、東アジアの科学の流れとその総体的な特徴を考察する。方法論的には、総合的視点をもって東アジア科学の全体を分析するところが新しく、目論んでいることといえば、現在、世界的に見て研究が手薄である朝鮮科学の正当な評価にほかならない。

本研究は非西洋科学古典を研究対象とするゆえ、否応なく、近代古典学の理念自体を見直す契機をもつ。また中国語と韓国語のOSをインストールしたシステムを立ち上げて、世界中の漢字データベースの利用を目論んでいるため、漢字古典利用のレベルが一挙に飛躍することも予想される。

予想される成果といえば、朝鮮科学史の専門的な研究者は世界的に非常に少ないゆえ、われわれの結論がそのまま世界の研究のスタンダードになると予想することができる。あるいはもっと大きく、独自の方法論をもった東アジア学という新たな研究領域を構築することができるかもしれない。

研究計画・方法

研究代表者と分担者の間の研究分担に関する基本原則（基本合意）は、研究代表者が東アジア科学古典の学説の分析を中心とするのにたいし、研究分担者は外的アプローチを試み、思想や文化との関係に注目して中国と朝鮮の科学を分析するところにある。

初年度は備品購入による研究環境の整備を主とする。予算の一部をコンピュータ（MAC一台、PC一台）の購入にあて、中国や朝鮮のOSをインストールしたシステムを構築し、サーバーを立ち上げ、研究室専用のLANを構築する。MACについてはエミュレーションを利用し、PCについてはパーティションをきって複数のOSを切り替える。またプリンタはネットを介して共用する。

短期の訪中と訪韓を通して、旧友の中国科学院自然科学史研究所の研究員や韓国科学史学会の研究者たちに援助を依頼する（代表者と分担者）。また東北大学を尋ね、大学所蔵の東アジア科学書を調査ならびに複写する（代表者）。

書籍の購入や複写については、あらかじめ2年度以降の準備をする。

A04 中国における制度と古典 科挙制度と言語史・文学史の相関から

研究代表者 平田 昌司
京都大学大学院文学研究科 助教授

研究目的

本研究は、言語史を文化史にとりこむための手法を確立し、古典研究に新しい視点を導入することを目的とする。具体的には、中国の言語規範・文体規範と科挙制度の関係の検討をとおして、中国人の「口語規範」「文語規範」、多言語社会における方言、言語規範を支える古典意識の変容を明らかにする。

本研究の特色と意義

言語史・制度史・古典受容史を総合した手法を提示し、領域を超えた中国古典研究をおこなうための、可能な手法のひとつを提示する。

研究の位置づけ

言語と社会史・文化史を統合させた研究は、中国については非常に乏しい。申請者の研究以外には、アメリカのB・エルマン、国内では唐澤靖彦氏の業績が存在するのみである。

従来の経過と成果

1992年以来、六朝～唐代韻律学形成における中央アジア文化の影響の可能性、唐宋期の方言・言語規範意識、歴史的な状況を解明する手がかりを求めるための現代方言記述につき、別記研究業績の成果を得ている。

研究計画・方法

(I) 中国古典研究手法の革新に関する国際共同討議

古典の起源・生産・流過程をめぐり研究手法について、近年人文科学研究の進展の大きい中国学界と国内学界から研究協力者を招いた対話・討議の場を2000年1月に設け、新しい研究方法論の構築をめざす。申請する旅費が高額となっているのは、中国・国内から古典研究者各5名程度を招聘する必要があるためである。

(II) 中国歴代における首語規範意識の調査分析

中国人の言語規範意識基礎調査を、六朝から唐代前半の歴史書・小説・随筆類を中心にすすめて内容を分析し、六朝から唐代前半までの言語史・試験制度史・古典受容史の相関関係を記述する。

A04 原始仏教思想の解明

パラモン教聖典の同時的解明を通じて

研究代表者 中谷 英明
神戸学院大学人文学部 教授

研究目的

パーリ仏典のうち、『スッタニパータ』、『ダンマパダ』、『サンユッタニカーヤ』などの諸仏典は、これまで最初期仏典としてほとんど区別なく扱われ、本文解釈がなされてきた。これは近代の仏教学者が、紀元後5世紀頃に制作されたパーリ注釈書の解釈に従ってきたからである。しかし実際には、仏陀の死後8世紀を経過し、教理体系が整備された時代の解釈は、テキスト本来の意味としばしば乖離している。申請者は、初期仏典の音韻、韻律、語形、構文、語彙、思想について統計分析を行い、パラモン教聖典『シャタパタ・ブラーフマナ』、古層『ウパニシャッド』との比較を通じ、初期仏典に4層が区別されること、またアショーカ王碑文の言語との関係および内容(孤独な遊行生活の推奨)から、その最古層部分(『スッタニパータ』の一部等)は、アショーカ王以前に遡り、教団生活を前提する次の層とは1世紀以上の懸隔があることを指摘した。

この最古層テキストを、注釈書に依拠するのではなく、その層固有の思想を提示するものとして読解する時、そこには他の層と明瞭に異なる世界観が現われる。生き生きとした現実感覚、呪術的なものの否定、理性を感情や肉体とともに捉える視点、また人間行動の動因としての「潜在欲望」の確認など、教理によって硬直した後代のテキストには見られない、直裁かつ柔軟な思考が読み取られる。それは従来考えられていたよりはるかに『ウパニシャッド』哲学に近似する。このように両宗教の聖典を読み合わせるにより、両者の解釈を同時に深め、草創期の仏教の宗教的本質を明らかにすること、これが本研究の目的である。

研究計画・方法

平成11年度には、上述の手続きによって抽出した仏典の最古層と、『シャタパタ・ブラーフマナ』・古層『ウパニシャッド』とを読み合わせ、綿密に分析しつつ、読解を進める。

『ウパニシャッド』、『ブラーフマナ』、仏教学関係文献の整備 パラモン教聖典関係図書+仏教学関係図書費

『シャタパタ・ブラーフマナ』データベースの欠落部作成 謝金

韻律分析プログラム・統計表作成プログラムの改良 謝金(専門的知識の提供)

外国の学者との研究打合わせ

『ヴェーダ』分野の専門家ハーヴァード大学M. Witzel教授と研究情報を交換する。 外国旅費

国内の学者との研究打合わせ

『ウパニシャッド』、『ブラーフマナ』に関し国内の専門家と研究情報を交換する。 国内旅費

A04 イラン・イスラーム文献が描くモンゴル時代の世界像の研究

研究代表者 杉山 正明
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 志茂 碩敏
財団法人東洋文庫研究部 研究員

研究目的

1. 本研究の研究目的

人類史上ではじめて世界が一個の全体像としてとらえられるようになった13・14世紀のモンゴル時代について、東西文明の枠をこえて、多言語文献による知見を生かしつつイラン・イスラーム文献の根本研究をおこない、当時の世界像を探ること。さらに、それによって古典研究の新しい視座を模索するうえでの有益な例示とすること。

2. 本研究の学術的特色・意義

1) 東西の研究者の「棲みわけ」をこえた多言語文献にもとづくイラン・イスラーム文献の根本研究とそれによるモンゴル時代の全体像の構築。

2) 原写本・原刊本など根本状態の原典文献群に溯る研究。

3) 日本人による新しい世界像・古典研究の例示。

3. 国内外の関連研究における位置

今までにない新しい地平を開くことになる。

4. 準備状況

マイクロフィルム化したイラン・イスラーム文献を大量に入手済であるほか、準備は十分である。

研究計画・方法

本研究のかなめとなるのは、すでに入手済の大量のマイクロフィルムを紙焼き写真の形に焼きつけて、読める状態にもってゆくことである。その焼きつけ費用は龐大であり、研究経費の多くをマイクロフィルム焼きつけ費に集中的にふりむける。研究代表者がこれに関連する作業をおこない、複写を1部研究分担者に提供して、相互に緊密な連絡をとりつつ研究を推進する。

平成11年度については、入手済のイラン・イスラーム文献のマイクロフィルムのうち、とくに緊急性の高い原写本10点を中心に焼きつけ、複写・整理・データ処理の

作業を開始するとともに、焼きつけた文献から順次、解読を行う。

A04 イスラームにおける伝承知と理性知

研究代表者 鎌田 繁
東京大学東洋文化研究所 教授

研究分担者 濱田 正美
神戸大学文学部 教授

研究目的

シーア派神秘思想とオスマン朝における知のあり方の解明を目的とし、そこに表出される世界像を文献資料から分析し、その特徴を明確にする。代表者鎌田はモッラー・サドラーの思想をより広い人間の自己理解、世界理解の一例として取り上げ、人類の思想史における位置づけを探るのを目的とする。人類の知の全体を視野に入れこの思索の特徴を析出しようとする研究である。これまでモッラー・サドラーの著作の原典校訂、翻訳および研究を行い、その後も研究のひとつの柱として彼の思想を様々な角度から論究している。彼の思想の全体像を把握するためには一著作の全体的研究が必要であり、翻訳・注解に力点を置いた本研究を構想した。分担者濱田は十分な研究紹介のされていないオスマン朝におけるイスラームの受容のあり方を解明することを目的とする。その時代の文献に用いられている言語の特徴、そこに見られるさまざまな思想の要素を分析しながら、その著作の全体像を捉え、代表的作品の校訂、翻訳、注解を行う。これまでオスマン語美文作品の研究を継続しており、そこに見られる政治論の内実を解明しており、翻訳を部分的に開始している。

研究計画・方法

代表者鎌田は神秘思想の文献を対象とし、分担者濱田はオスマン朝の歴史文献を扱い、異なる資料からイスラームの「知」を探求する。鎌田はモッラー・サドラーの『神的証明』の全文テキスト・データベースを作成し、文献研究の基礎をつくる。また濱田はムスタファ・アーリーらの著作のデジタル化をおこなう。その作業のためのコンピューターが必要である。また注解作業に必要な原典や文献索引などを中心に緊急度の高い文献から収集する。またそのために外国旅費が必要である。

A04 ユダヤ教の法論理的思考の特徴とその形成に果たしたタルム - ドの影響

研究代表者 市川 裕
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

研究目的

本研究は、ユダヤ教文献タルムードを特徴づける討論方式とユダヤ法解釈における論理の徹底に注目し、宗教的法的な古典が民族の思考の型を形成すること文献学的・歴史学的、そして宗教学的に検証することを目的とする。

本研究は、特定領域研究「古典学の再構築」プロジェクトにおいて、イスラエル学という地域文化、及び世界像という共通テーマに位置づけられ、具体的には以下の三点（特に第一点を主とする）を課題とする。

1. タルムード「サンヘドリン篇」の構造分析とタルムード独自の「合理性」の抽出
2. ユダヤ人社会におけるタルムード学習の伝統：教育制度、解釈の蓄積
3. 近代のユダヤ人解釈後のタルムード研究の在り方：イスラエルとディアスポラ

本研究は、いくつかの科学研究費研究を通して、内外の研究者との交流によって着想を深めてきたが、特に「古典学の再構築」の2年にわたる共同研究の中で、他の世界宗教文化の古典との比較研究を行うという枠組みが得られ、既にニューズレターとして成果の一部を結実させてきた。

研究計画・方法

平成11年度には、パピロニア・タルムードの「サンヘドリン篇」の読解と構造分析を行うが、特にユダヤ教的思惟の合理性を分析するのに適した箇所を数多く選び出して重点的に考察し、日本語版の制作に伴う問題点を徹底的に検討する。タルムードは伝承の学習の積み重ねであるため、総索引やCD-ROM等の活用によってタルムード全巻のクロス・リファレンスを徹底させ、聖書とタルムードの相互関係を明確にする。

本研究では、国内文献が極めて不足しているので、第一次、二次文献を充実させるとともに、イスラエルとアメリカ合衆国の研究者（ラビ・A・シュタインザルツ氏、S・サフライ教授、J・ゴルディス教授ら）の協力が不可欠である。

本研究において対象とするサンヘドリン篇は、それ自体、裁判の在り方を主題とした法伝承を扱っているため、サンヘドリン篇の内容と内容と構造分析は、宗教と法の関係を究めるのにふさわしい対象である。したがって、分析においては、発見と裁判制度、賢者と裁判人との社会的役割、賢者の条件、優れた裁判人の条件など、古代

ユダヤ人社会の法文化的特徴もあわせて考察される。

A04 古代ギリシア像の再検討

研究代表者 内山 勝利
京都大学大学院文学研究科 教授

研究目的

(1)(2) 今般の特定領域研究(A)「古典学再構築」(略称)において、研究項目「古典の世界像(A04)」に所属する申請者は、古代ギリシア・ロ・マの世界像の解明を課題としているが、特殊的には、われわれの古代ギリシア世界についての理解のあり方を、主として哲学(当時の意味での)および文芸作品を通じて再検討することを試みたい。

当面の関心の中心は、今日一般に「ギリシア的理性」「ギリシア的ロゴス性」と言われるものの本性がどのようなものであったのかの解明に置かれる。調書に記した仕方でギリシア哲学を見直すとき「ギリシア的理性」「ギリシア的ロゴス性」の実態は、さまざまな仕方で異なった様相を顕してくる。原典にもとづいてその実相を明らかにし、その中でプラトンやアリストテレスの思想をも新たな視野から再評価しなおすことに努める。

(3) 最近の諸外国における主要な研究動向の一つとして、初期ギリシア哲学のオリエン的な特質に目を向けつつあるが、申請者の立場は、そうした要因を古代ギリシア思想の全般にわたる基調として探ると同時に、ある意味ではそれが「ギリシア的理性」や「ギリシア的ロゴス」を、比類なく活性化させる根拠ともなっているのではないかと考える。

研究計画・方法

研究の具体的推進の初年度に当たる平成11年度においては、まず主要な研究状況全体を再確認し、その成果をできるだけ広範囲にわたって批判的に摂取することに努める。現在注目している比較的最近の研究者としては、W. Burkert, P. Kingsley, C. Osborne, さらに V. Tejera などが挙げられる。むろん研究は、これらの二次文献との取り組みとともに、さらなる古典原典作品の解明に重点が置かれなければならない。

主要哲学者の著作理解にはよりいっそうの深化を期するとともに、申請者としてはこれまで十分に取り組んでこなかった領域として、ヒポクラテスやガレノスを中心とする医学思想に大きな注意を払い、特にそれらにおける哲学との結節点や影響関係を通して、ギリシア思想の新たな特質の解明に資する手がかりを求めることを

目指したい。また従来から主要テーマとしているプラトンの「対話篇」構造の特質と意味の研究も、当該研究課題と深く呼应するものであり、これを継続することも主たる作業の一つとしていきたい。

以上のような計画から、研究経費は主として文献の調査と収集に当てられる。

B01 仏教における主要概念のインド・中国・日本における伝承と受容

研究代表者 江島 恵教
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究分担者 佐古 年穂
駿河台大学現代文化学部 助教授
丘山 新
東京大学東洋文化研究所 教授

研究目的

江島① 1) 既に作成されている『大毘婆沙論』のテキストデータベースを利用し、固有名詞・経典引用等をマークアップする方法を検討し、確立する。

2) その入力作業とデータ整理。

② テキストデータベース、そのユーティリティーを開発し、かつ文献のテキスト自体と、伝承・受容の過程を明らかにしようとする点に、研究上の特色がある。

③ 国内国外においては、まだ『大毘婆沙論』についての厳密な文献批判的研究は遂行されていない。

佐古① 1) 『俱舍論』第4章業品の写本に基づくサンスクリット・テキストの校訂・発表。

2) P.Pradhan校訂の『俱舍論』と、Sthiramatiの註釈・Purnavardhanaの註釈とのConcordanceの作成。

3) 業品部分の衆賢の『順正理論』との対応表を含む形で、Sthiramatiの註釈の研究。

②③ 1) 既存のテキストにおいては参照されていない両漢訳、チベット訳、各種註釈を参照してより正確なテキストの作成を期す。

2) これまで発表されていないConcordanceを発表することにより、両注釈書の利用の便を図る。

3) これまで厳密になされていない二つの註釈の対照により、両書のより深い理解の材料を提供する。

丘山① 『維摩詰経』や浄土経典類を採り上げ、それらの経典が中国でなぜ受容され歓迎されたのか、またその時代的背景を明らかにする。それにより、その経

典編纂時における趣旨とのずれも対比的に明かされるであろう。

② 本研究は、中国文化という大きな枠組みの中で仏教の果たした役割を明らかにするという従来にはない特色と独創的な点を持つ。この研究により、中国文化の中で仏教が果たした役割の一端が新たに明らかにされる。このことにより、従来は個別研究になっていた中国仏教と中国思想・中国文学とが共通の接点を持つようになる。

③ インドで誕生した仏教思想が中国や朝鮮・日本で受容され、変容したかを明確にしようという本研究は、その独自性ととも、東アジア諸地域における文化の受容と交流という大きな課題のなかでも重要な一翼を担うものである。

研究計画・方法

平成11年度 現在『大正新修大蔵経』テキストデータベース(SAT)他のインターネットの利用、当該研究に必要なテキストデータベースの作成・利用、サンスクリット、チベット語用のDiacriticを含む特殊なフォント並びに漢字が混在した複雑なレイアウト等、コンピュータの利用は不可欠であり、各自用途に応じたコンピュータを購入する。その上で、江島は『大毘婆沙論』、佐古は『俱舍論』並びにその註釈書、丘山は『維摩詰経』の研究において必要なデータの入力・整理を開始する。

平成12年以降 各自データの整理・統合をおこない、江島は『大毘婆沙論』の固有名詞、経典の引用に関する調査の結果をテキストデータベースに統合し、佐古は『俱舍論』業品テキストの校訂並びに『俱舍論』註釈書の研究、丘山は『維摩詰経』並びに浄土経典類に関する研究を完成させる。

各自の研究を相互に点検し合い、特に共通的な方法論を確立し、仏教思想のインド・中国ないし日本における伝承と受容についての研究の総合化を図る。

B01 ギリシャ・ローマ文献の形成・伝承・受容史の研究

研究代表者 中務 哲郎
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 エリザベト・クレイク
京都大学大学院文学研究科 教授

南川 高志
京都大学大学院文学研究科 教授

研究目的

(1) 本研究は、「ヒポクラテス集成」、史書群「ヒスト